

身の回りの生き物と触れ合いながら、自然の大きさを考える取り組みが各地で広がっている。小学校のころから地域固有の生態系について学ぶことで、自らのこととして環境問題に向き合えるようにするほか、ふるさとへの愛着を深める狙いもある。専門家は「映像などではなく、自らが自然の中に身を置く機会が重要。地域の特色を生かした取り組みがこれまで以上に広がってほしい」と期待する。

京都府亀岡市を流れる保津川に2017年夏、ライフジャケット姿で手に網を持った子供たちが集まった。川の浅瀬に入ると、網で水をすくいながら、魚や水中の昆虫などを採集。網からスジシマドジョウが見つかると、講師が「京都ではとても珍しい」と解説し、子供たちからは歓声が上がった。

川遊びのようだが、実は同市が運営する小中学生向けの「亀岡生き物大学」が昨年夏に開いた「水辺の教室」。同大学は7月から12月に月1回程度のペースで、地元の自然に詳しい市職員らが市内の川や森林に子供たちを連れ歩き、魚や昆虫を捕まえたり観察したりしながら生態を学ぶ。11年に始まった取り組みは評判を呼び、多いときには200人を超える子供らが参

育む

コウノトリに優しい水田作り・多摩川歩き調査…

環境問題 まず地元を



亀岡生き物大学で講師から魚の生態について学ぶ子供たち

小学生、自然に触れ考える

加したという。昨年の水辺の教室に参加した小学4年の中川遼祐くん(9)は「色々な生き物がどのような場所に住んでいるのかよく分かり、楽しかった」と振り返る。双子の兄弟の宗祐くん(9)も「水質も調べ、保津川の水がとてもきれいなことが分かった。生き物とふれあえる水辺を守りたい」と語った。

「大学」を運営する「地球環境子ども村」は市の課外授業専門の施設。地元豊かな自然を通じ、子供に環境や命の大切さを学んでもらう狙いで整備された。ほかにも、月に2回ほど植物や星空を観察するワークショップを開き、子供が自

然に興味を持つきっかけづくりを続ける。地球環境子ども村推進官の仲田丞治さん(62)は「亀岡は山や川、森林に恵まれ、生物も多様だ。自然に慣れ親しみがってこれれば」と期待する。

身の回りの自然で起きている課題に対し、子供たち自身で何ができるのかを考え、行動してもらう動きもある。

島根県雲南市大東町では、児童が国の特別天然記念物であるコウノトリに優しい環境づくりを学ぶ。野生のコウノトリが徐々に増えていくが、ハンターの誤射で1羽の雌が17年春に死んだのを機に、コウノトリ

との共生を学ぶ機運が高まった。近くにコウノトリの巣がある同市立西小の5年生は「えさのドジョウやカエルが生息できる環境を整え、コウノトリにとっての理想の水田作りに取り組み。今年5月に田植えを終えた水田は「幸せ運ぶチャレンジ田んぼ」と名付けられ、コウノトリに悪影響を及ぼさないように農薬を使わないようにした。稲穂が育って水田の水を抜いても、コウノトリの餌となる水中の生物が周辺にとどまりやすいように水田の周囲に溝を作った。

取り組むことが自ら考え、行動する力にもつながればと思つ」と話す。

東京都多摩市にある多摩第一小では、学校のすぐ脇を流れる多摩川を舞台に自然環境を学んでいる。川を実際に歩いて、児童がそれぞれ魚や野鳥などの生き物のほか、川の水質やゴミの量などのテーマを設定。テーマごとにグループに分かれ、調べた内容を共有したり、討論したりする。魚の生態などさらに分からないことがあれば、学校が専門家を呼び、児童に疑問を解消してもらう。

調査内容や浮かび上がった環境の課題の解決策をまとめ、全校児童や保護者、地域住民に発表する。同校の西田和恵副校長は「地域の環境を大切にすることを話している。」(安田龍也)

国や国際機関も後押し

国や国際機関も持続可能な社会づくりの一步として、子供への環境教育を重視する。文部科学省は2008年に改訂した小中学校の学習指導要領で、各教科で環境への配慮や生き物とのかかわりを学ぶという指針を加え、各校の取り組みを後押ししてきた。

環境省も16年度以降、文科省と共同で「ESD(持続可能な開発のための教育)活動支援センター」の設置を進める。ESDに取り組む団体間の交流や活動事例などの情報共有を図る狙いだ。

国連教育科学文化機関(ユネスコ)も環境に対する意識の育成に向け、独創的な取り組みをする学校を「ユネスコ・スクール」に認定している。

東京家政大学の宮本康司准教授(環境教育学)は、「自然とふれあうなどの環境教育は幼少期ほど効果が高く、将来にわたる環境意識の醸成につながる」と指摘。「学校などの教育現場は地域の特色を生かし、子供らの印象により残りやすい原体験の場を用意できるように知恵を絞ってほしい」と語る。